

古代地域計画の原理 その5 続聖山論

——政治都市の起原——

(株)水管理工学研究所 正員 工博 木村俊晃

Principles of Ancient Regional Planning Part 5 On Holy Mountains-2

The Origin of Political Cities

By Toshimitsu Kimura

概 要

昭和57年以来4回(その1対称論・その2尺度論・その3幾何図形論およびその4聖山論)にわたって、主に日本の王城・王墓・神社・仏閣・教会など古代からの聖地に建設されたと考えられる宗教・政治施設の位置関係を解析し、古代日本における高度測地技術の存在を推定するとともに、それらの位置決定原理の根本に神にもっとも近い聖なる山頂を対象とする聖山思想があることを示し、それが遠くエジプトに発することを推定した。

今回は、昨年に続いて聖山論の実施例をエジプト・エーゲ海沿岸・北イタリアなどの地中海沿岸地域およびシンガポール・中国・朝鮮・日本などの東アジア地域について追加して提示し、聖山思想伝播の地域的拡がり時期を推定するとともに、政治都市の起源について考察する。

キーワード: 古代・測量・都市

1. 地中海沿岸

1.1 エジプト—セラビト・エル・カディム神殿

シナイ半島の中央やや南のスエズ湾寄りにある小丘の上に考古学界では著名な遺跡「碑文の山」セラビト・エル・カディム神殿がある。この丘の麓から神殿のある頂上まで歩いて30分というからそれほど高くはなく、また、神殿の規模も小さい^{*}が、エジプト古王国時代(BC 2700~2000)以来の多数の碑板と本土と同じヒエログリフで書かれた神に祈る碑文の内容から、この神殿は古代エジプトにおける重要な宗教施設であったと推定されている¹⁾。

しかし、エジプト本土からはるかに離れた僻地になぜこのようなエジプト有数の宗教施設があるのかについては、従来の学説では全く説明されていない。

ところで、この神殿についての聖山論の解析結果は図-1のとおりであり、その要点はつぎのとおりである。

(1) 神殿の位置はシナイ山(2285)の麓にある著名なカテリーナ僧院^{**}と正しくその北西45°の方向にあるコーシラ山(426)の midpoint に当り、両側の線分長はいずれも400ロイヤルスタディオ^{***}(400×181.5m=72.6km)である。

400スタディオ³⁾という長さは「幾何図形論」で示したアビドスの三角形の二等辺長であるが、設定年代はむしろセラビト・エル・カディム神殿の場合の方が古いのではないかと考えられる。そのことは碑文の内容だけでなく、原形に近い聖山論の構造およびアビドスの三角形の場合はネツツイ山以外の2頂点は人工の神殿であることから推定される。

(2) 神殿の位置はシナイ山を含む山群と紅海をはさんで対岸の本土にあるガリブ山(1757^{****})を含む山群との間で大規模な(最大線分長145.2km)複合双山関係を形成している。シナイ山群中のカテリ

* セラビト・エル・カディム神殿の長さは約75mであり、カルナック神殿の約400mと比較すると、ほぼ1/5である。

** この地点がカテリーナ山かシナイ山であれば聖山論的に完全であるが、そこまでの偶然は生じなかったということであろう。なお、カテリーナ僧院には泉があるというが、それが自然物かどうかは不明であり、この場合、コーシラ山とセラビト・エル・カディム丘に対し、カテリーナ僧院が重山点にあると考えるべきかも知れない。

*** 「尺度論」²⁾で示したように、ギリシャ・ローマ系のスタディオ(以下STと記す)=184.75mに対応するエジプト系の尺度であり、ロイヤル・スタディオ(RST)と称することにする。この長さはすでに「幾何図形論」において志賀島で検出している。なお、 $184.75:181.5=(1.2)^2:\sqrt{2}$ であって、両者の差は1.78‰、10cmに対し1.78‰であって、1/1,000の精度ならば十分識別できる。

**** この山と山群中の第2峰アブカジャバ山(1461)はセラビト・エル・カディム神殿に対し双山関係にある。

ーナ山（2642）はエジプトの最高峰であり、* 紅海をはさむ規模からみてもこの聖山関係はエジプトで第1級のものということができ、このことがこの神殿がここに設定された理由と考えられる。

(3) 神殿と マドサス山（740）の距離は400の2倍、800 RSTであるが、その線分の中点とその東北方にあるグリム山（1229）の距離は400 RST（72.6 km）であり、結局神殿—中点—グリム山の三角形は二等辺長が400 RSTの二等辺三角形を形成している。さらに、この三角形の両底角が51.5°であることから、この三角形は「幾何図形論」で示

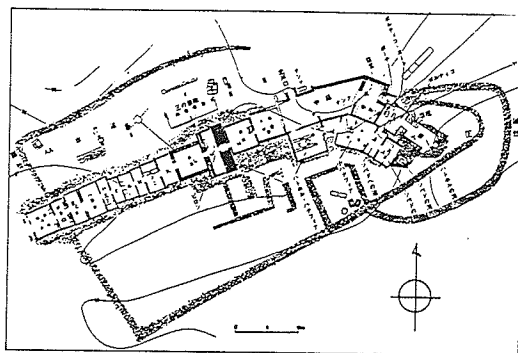


図-2 セラビット・エル・カディム神殿の平面（ギヴェオンによる）

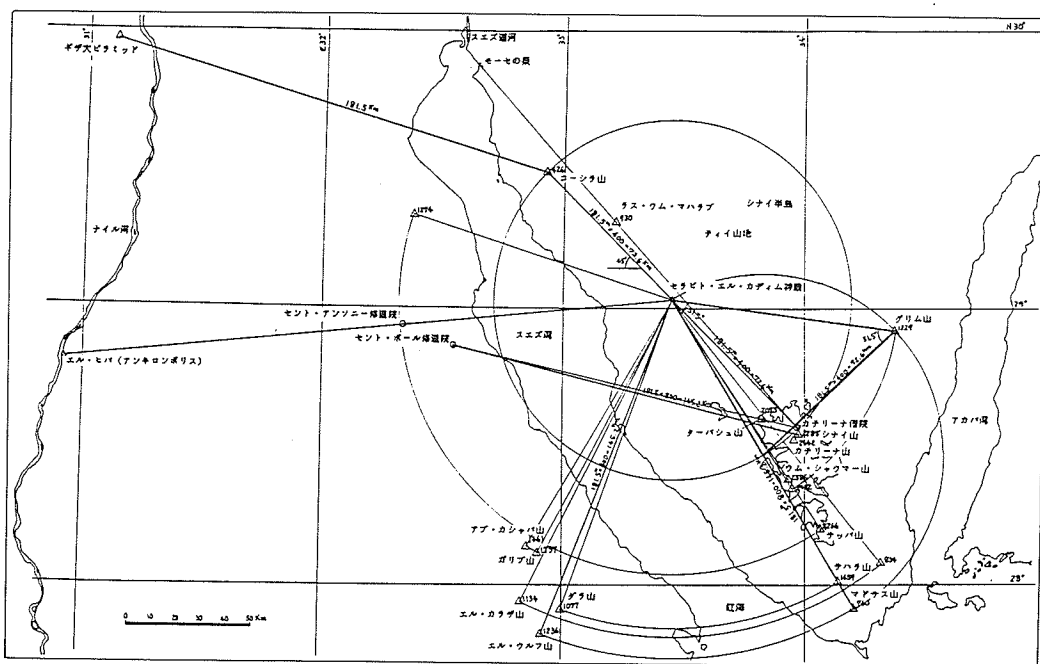


図-1 セラビット・エル・カディム神殿の聖山関係

したピラミッド図形であり、シナイの三角形と称する。この図形はギザの大ピラミッドよりも古く、世界でもっとも古いピラミッド図形ではないかと考えられる。

(4) この神殿の位置設定はRST（181.5 m）を基準として行なわれているが、コーシラ山とギザのピラミッド群の距離も181.5 km（1,000 RST）となっており、神殿が自然の丘の上にあることから、ギザの位置が後で設定されたと考えられる。なお、シナイ山とセントポール修道院間の距離は800 RSTである。

(5) 神殿東部の祭壇の礼拝線の方向はシナイ山やカテリーナ山に向かって東南ほぼ45°になっているのではないかと考えられるが、ピートリーが確定し

たという神殿の平面（図-2）の精度が不明で、では詳論しにくい。

1.2 エーゲ海沿岸—クレタ・ミケーネ・トロイ

エーゲ海文明はBC 2000年頃にはじまり、E. ナックおよびW. ヴェークナーに「ヨーロッパとアジアの最初の対決」といわせたトロイ戦争⁴⁾（BC 1200年頃）で終る。この文明の解明にはハインリッヒ・シュリーマンによるトロイの発掘やアーサー・エバンズによるクノッソス宮殿の発掘などめざましい考古学上の成果がある。

* 2,000 m以上の山は、シナイ半島にはカテリーナ山・シナイ山など9峰あるが、本土にはシャイブ・エル・パナト山（2187）1峰しかない。

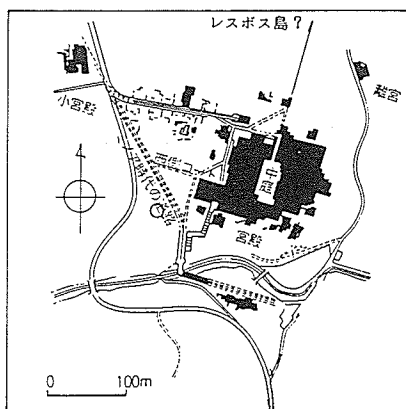


図-3 クノッス宮殿の平面（文献5）による
— 中心線はレスボス島に向いているか？



図-5 トロイの円

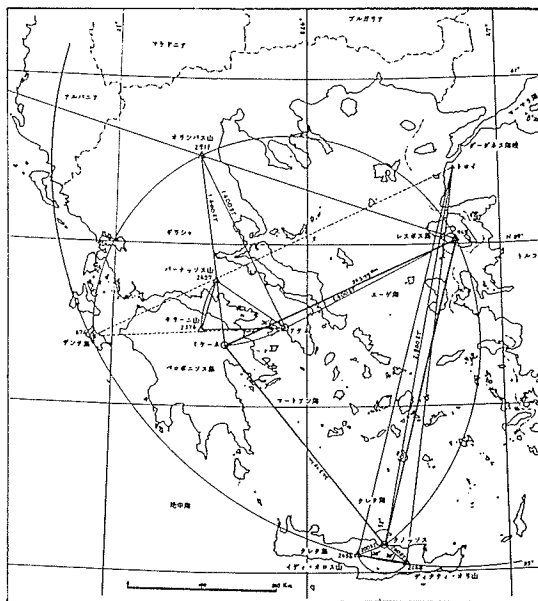


図-4 エーゲ海沿岸の聖山関係

図-4に示したように、クレタ島のクノッス^{*}は明らかにイディオロス山（2456）とディクティオリ山（2148）の双山点にあるが、その二等辺長は200 ST、両底角は 30° となっており、200STはアビドスの三角形の二等辺長400 STの $1/2$ であるから、この三角形は正にアビドスの三角形の $1/2$ の相似形であって、クノッスの三角形と称する。

遠くトロイ遺跡は同じくこの両山の双山点にあり、クノッスからの距離は2,800 STである。この2,800 STという長さはアビドスの三角形の2つの辺長、すなわち、700 STと400 STの最小公倍数であって、まずトロイのクノッスに対する従属関係、さらに、クノッスおよびトロイ両者のエジプトに



図-6 ホメロスの円板状地球（E. ナックによる）

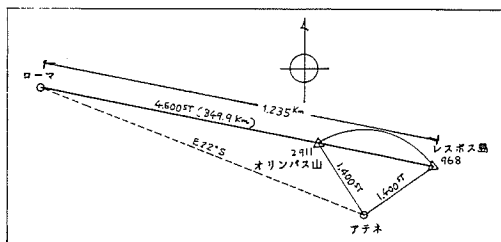


図-7 ローマ市とアテネ市の位置関係

対する従属関係を示している。

オリンパス山から1,400STにあるミケーネはクノッスとレスボス島の968m峰から等距離(343.75km)にあるが、この二等辺三角形はピラミッド図形である。

古代ギリシャにおけるもっとも有力な都市国家であり、現在はギリシャの首都であるアテネ市^{**}はギリシャ本土の最高峰オリンパス山（2911）と前述

* クノッス遺跡より多少海岸寄りになる。

** アテネ市は西方パーナッス山（2457）とキリーニ山（2376）に対しても双山関係にあり、アテネ市 — パーナッス山 — キリーニ山の三角形は頂角 36° の第二五角三角形である。

のレスボス島の968 m峰から1,400STの双山点にある。この1,400STはアビドスの三角形の底辺長700STの2倍であり、クノッソスとトロイ間の距離2,800STの1/2でもあって、両者に従属している。

ところで、トロイを中心とし、クレタ島のイディオロス山およびディクティオリ山を通る円を画くと、図-4に示したように、ギリシャ本土の海岸線がほぼ1/4円周の中に包括される。さらに、同じ半径の全円*およびトロイ—ギザの大ピラミッド**間の距離約1,230kmを半径とする円***を画くと図-5のとおりであり、図-6の「ホメロスの円板状地球」と対比してみると、後者がイタリア半島を縮めてアルプスを取り入れている点を除いて範囲がよく一致しており、トロイの位置はエーゲ海文明圏の中心点と認識されていたのではないかと考えられる。

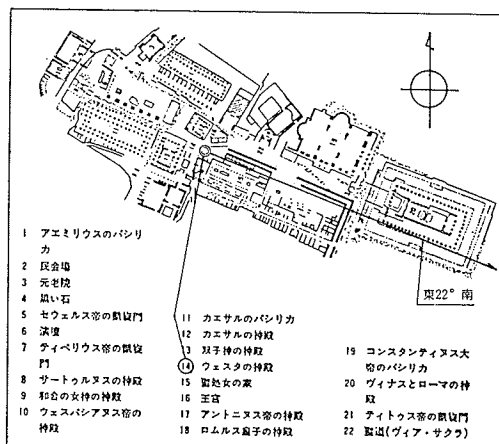


図-8 フォロ・ロマーノの建物配置図(野上による)

1.3 北イタリア—エトルリア

ローマ人がエトルリア人の王を追放して共和制をしいたのはBC 6世紀末とされている。⁷⁾

現在イタリアの首都であるローマ市はすでに示したエーゲ海のレスボス島の968 m峰とオリンパス山(2911)を結ぶ線の延長上、オリンパス山から約4,600ST(約850km)の距離にある。^{****}すなわち、両山の重山点にあるわけであって、この地域の文明のエーゲ海文明に対する従属性を示している。図-8は古代ローマの中心フォロ・ロマーノの建物配置図であるが、明らかに見てとれる長手方向すなわち東22°南の方向にはアテネ市がある。フォロ・ロマーノの中心近くにあるウェスター神殿に安置されて

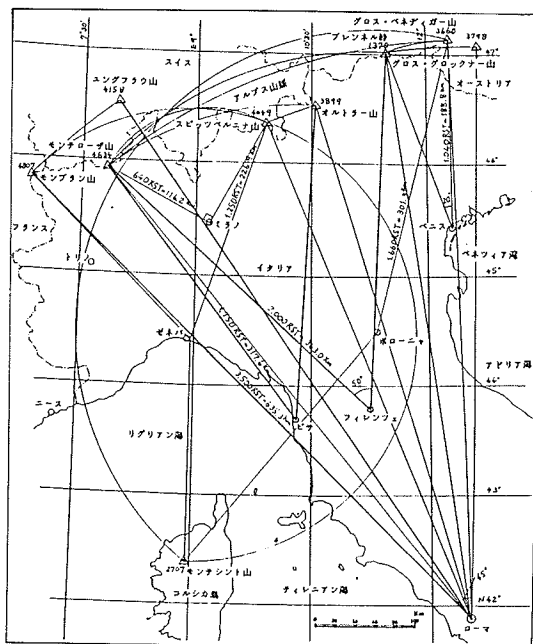


図-9 アルプスに対する北イタリア諸都市の双山群

ローマの安全を保証するものとされたというアテナ女神像はトロイから運んだものと伝えられているが、アテネ市のアクロポリスのアテナ神と測地学的に関係づけられているようである。

ところで、ローマ市周辺での高山といえどももちろんアルプスであるが、ローマ市のみでなく、フィレンツェ市・ピサ市・ボローニャ市・ベニス市・ゼノバ市・ミラノ市など北イタリアの諸都市がアルプスの著名な高峰、モンブラン山(4807)・モンテローザ山(4634)・ユングフラウ山(4158)・ピッツベルニナ山(4049)・オルトラ山(3899)・グロスグロックナー山(3798)・グロスベネディガー山(3660)・ブレンネル峠(1370)およびコルシカ島のモンテシント山(2707)などに対して華麗に展開している双山関係は図-9のとおりであり、ローマ市とモンブラン山またはユングフラウ山間の距離635.25 kmが最長である。

ローマ帝国の政治的権威の裏にはこれらの壮大な

* トロイの第一円と称する。

** エーゲ海文明のエジプト文明に対する従属性を考慮して想定した。

*** トロイの第二円と称する。

**** 距離が長いので、広域を対象とした地図では図法によって直線上にない場合がある。なお、レスボス島の968 m峰からローマまでの距離、約1,235 kmはさきに示したギザの大ピラミッドとトロイ間の距離1,230 kmとほとんど等しく、また、「聖山論」で示した大平山と権原宮間の距離(精測の結果1,221 km)ともほぼ等しい。

聖山系における有数の双山点であるローマの支配があったのである。

ところで、前述の635.25 kmは3,500RST*であり、ピサ市のモンテローザ山およびオルトラ山からの距離1,750RST(317.62km)はその1/2である。また、フィレンツェ市のモンテローザ山およびブレンネル峠からの距離は2,000RST**(363.0 km)であるなどこの地域では単位長としてRST が採用されている。

ローマ市のオリンパス山とレスボス島の968 m峰に対する重山関係からみて、その位置決定はエーゲ海地域の聖山点の決定よりも後に行なわれたと考えられるが、エーゲ海地域では単位長としてST が使用されていたから、この場合はRSTがST より後に使用されていることになる。

なお、考古学的にはエトルリア文明についてはBC 700年頃までしか取り扱われていないようであるが、「ホメロスの円板状地球」に示されている範囲にアルプスまで入っていることからみると、ローマの位置決定はBC1200年のトロイ戦争以前に行なわれており、したがって、エトルリア文明の発祥もその頃まで遡る可能性が強いと考えられる。

2. 東アジア

2.1 シンガポール

シンガポールの首都であり、国際金融センターとして発展しているシンガポール市の古代についてはほとんどわかっていないが、エジプト女王の船がインド洋を渡ってマレー半島やスマトラ島に達していたことは考古学的にも認められている。

図-10から明らかなように、シンガポール市はスマトラ島にある顕著な2山クリンチ山(3805)とタラクマウ山(2912)に対して双山関係にあり、両山との間の距離は2,400ST(400ST×6=443.4 km)であって、クレタ島の場合とよく似たパターンを示している。双山線とスマトラ島の海岸線の交点にはパダン市があり、また、シンガポール市を中心とし、双山の2山までの距離を半径として円を画くとマレー半島のクアラトレンガヌ市およびパンカ島のパンカルピナン市さらに前述のパダン市などが円弧の上にあるが、これらの地点によって、図-10のように、底辺の2角が45°の直角二等辺三角形とダブルの木牟礼の三角形が構成されている。

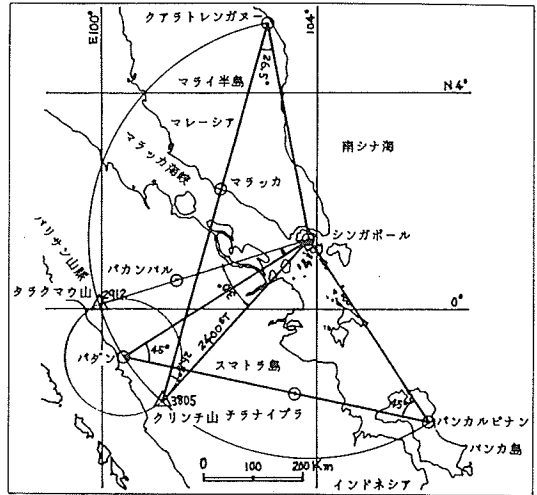


図-10 シンガポール市の双山関係

2.2 台中

台北市が政治の中心都市になったのは、後のことであり、1884年には台中市が省都になっており、今日でも台湾政府は政府機関の一部を台中市周辺に移している。すなわち、中興新村の省政府、霧峰の台湾省議会などである。

台湾第一の高峰は玉山(3997)——旧新高山である。

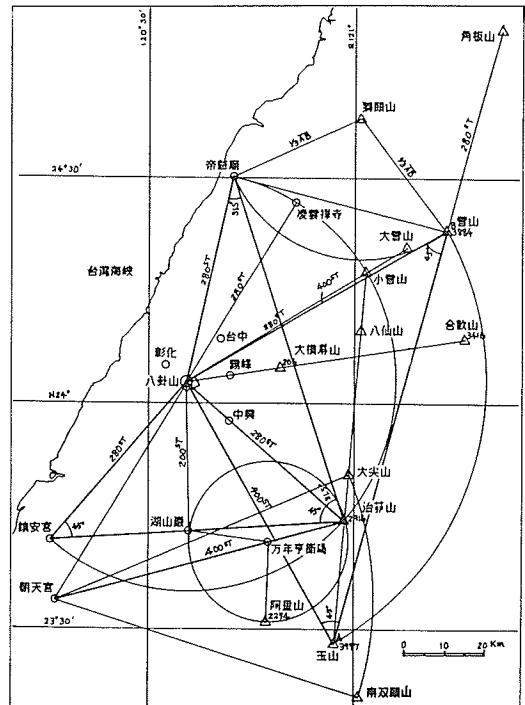


図-11 台中市周辺の聖山関係

* アビドスの三角形の底辺長700STの5倍がRSTになっている。

** アビドスの三角形の二等辺長400STの5倍がRSTになっている。

り、第2峰は雪山(3884)―旧次高山であって、両山が併立するパターンはクレタ島やシンガポールの場合とよく似ているが、これら両山を双山にとり、距離を400ST(73.9km)にとった地点が聖地となっていると認められ、その地点は彰化市の八卦山ではないかと考えられる。すなわち、この地点の特異性はつぎのとおりである。

(1) 玉山・雪山および八卦山が構成する三角形は直角二等辺三角形であり、二等辺長はアビドスの三角形の二等辺長と同じ400STである。

(2) 八卦山と治茆山(2916)間の距離は400ST×0.7=280ST(51.7km)^{*}であり、中興はこの線上にある。また、八卦山と鎮安宮間の距離も同じく280STであって、三角形八卦山―治茆山―鎮安宮も直角二等辺三角形である。なお、この三角形の底辺治茆山―鎮安宮の長さはほぼ400RST(72.6km)である。

(3) 八卦山と凌雲禅寺および帝爺廟間の距離もそれぞれ同じく280STであり、とくに、三角形八卦山―治茆山―帝爺廟は底角31.5°の崇神の三角形である。

(4) 八卦山と湖山巖間の距離は200ST(400ST×1/2=37.0km)であり、クノッスの三角形の二等辺長に等しい。

(5) 霧峰は八卦山の大横屏山(1208)と合歆山(3416)に対する重山線上にある。

2.3 咸陽

秦は始皇帝の中国全土統一(BC221)に先だつこと約130年、BC350年に咸陽に遷都しているが、この地点は太白山(3666)と華山(2200)からそれぞれ600ST(200ST×3=110.85km)の

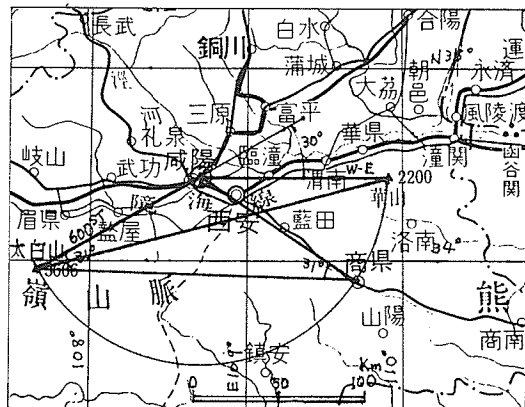


図-12 咸陽の双山

距離にある双山点である^{**}。

咸陽と華山を結ぶ線は東西線であり、咸陽と太白山を結ぶ線はそれに30°傾斜していて、三角形咸陽―華山―太白山の両底角は15°である。なお、商県市は咸陽市から同じく600STの距離にあり、三角形咸陽―太白山―商県市は両底角が31°で崇神の三角形とアビドスの三角形の間である。

2.4 北京

北京が中国の首都になったのは、AD1259年、元の5代フビライ・ハンが大都と称したこの地に都を移したときが最初である。しかし、西北郊外約10kmにある頤和園(万寿山)は歴代皇帝の行宮があり、清朝になって西太后が離宮として整備したのであるが、その発祥はもっと古いものと考えられる。



図-13 北京の双山

図-13に示したように、西の海龍山と東の雲蒙山はほぼ正しく東西線上にあるが、万寿山はこれらの両山からセラビト・エル・カディム神殿の基本長となっていた400RST(72.6km)の距離にあり、双山が東西線上にあることを考慮すると稀有の双山点にあるといえる。^{***}

なお、海龍山と雲蒙山間の距離は74.5kmであって、正三角形となる双山点は人工とされる昆明湖の池にある。

* クノッスとトロイ間の距離2,800STの1/10である。

** 厳密には、市の東北郊外になる。

*** この双山を反影してか、万寿山上の建築物は正しく南面している。

2.5 朝鮮北部

この地域には古く（BC 108）漢の4郡（楽浪・臨屯・玄菟・真番）がおかれているが、広開土王の碑文に記されている日本との争い（AD 400 頃）や下っては高松塚古墳壁画の源流とみられている壁画古墳の存在などによって日本との深い文化交流が推定されるなど、大和朝廷とかゝわりの多い高句麗の故地でもある。

中国の山東半島に向いあって黄海に突出し、海上交通の要地をなす遷津市は大白山脈の最高峰金剛山（1638）と狼林山脈の東南部にある独立峰白山（1724）を双山にとる位置にあり、両山からの距離はオリンパス山からアテネ市までの距離と同じ1,400ST（258.65 km）である。また、北方中国との国境にある新義州市と南方の大田市*とはいずれ

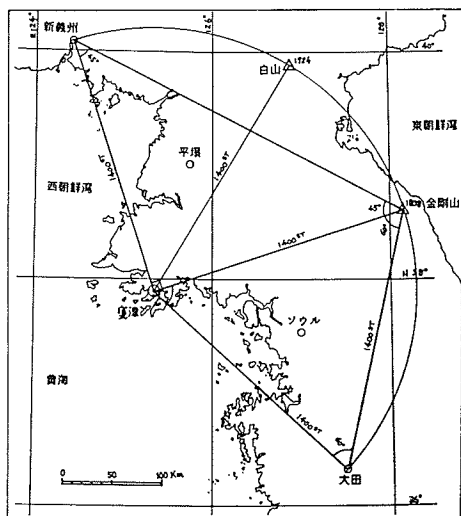


図-14 遷津の双山関係

も遷津市から同じく1,400STの距離にあり、また、大田市は金剛山からも1,400STの距離にあって、三角形遷津市—金剛山—新義州市は直角二等辺三角形、三角形遷津市—金剛山—大田市は正三角形となっている。

3. 日本

3.1 立岩遺跡

10面に及ぶ端正な前漢鏡の出土と甕棺墓で知られ、考古学上著名な立岩遺跡は弥生中期の遺跡とされているから、位置選定の年代は弥生時代初期BC 200年頃かまたはそれ以前ということになる。

福岡県飯塚市にあるこの地点は遠賀川の本川上流

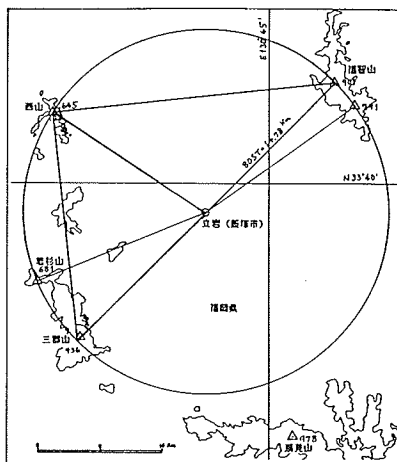


図-15 立岩の複合双山

の山間要害の地であり、福岡市の東に連なる三郡山地とその東北方直方市の東にそびえる福智山系の中間、河岸の丘陵に位置する。

この遺跡の地点は福智山（901）と三郡山（936）を結ぶ直線上にあり、福智山とその東南の791m峰・西山（645）および若杉山（681）の4峰に対して複合双山関係にあり、各山頂までの距離は80ST（14.76 km）であって、この長さはアビドスの三角形の二等辺長400STの1/5であり、セラピト・エル・カディム神殿の800RSTのほぼ1/10である。

また、二等辺三角形立岩—三郡山西南**—西山の底角は51°であって、この三角形はほぼピラミッド図形であり、その大きさはシナイの三角形のほぼ1/5である。なお、三角形三郡山西南—西山—福智山は直角三角形である。

3.2 亀ヶ岡遺跡

縄文晩期に東日本***に広く分布したとされる高度の土器、亀ヶ岡式土器の中心的出土地として著名な亀ヶ岡遺跡は立岩遺跡とならんでわが国屈指の古代文化遺跡であるが、その位置選定年代はBC 300年頃かそれ以前ということになる。

この地点は津軽半島の日本海側の海岸に東西巾4 km、南北30 kmにわたって連なる屏風山砂丘の中央部東側に位置し、岩木川の沖積平野を一望できる好点であるが、南の最高峰岩木山（1625）と北の木無山（587）の双山点にあり、両山頂までの距離は140RST

* 前回の「聖山論」において、極原宮の三角形の頂点の一つとして、大田市が聖山論的要地であることを示した。

** 山頂でなく、多少西南にずれた地点になっている。

*** 亀ヶ岡式土器の出土地は北海道・東北・関東・中部から近畿の一部にまで広がっているとされている。

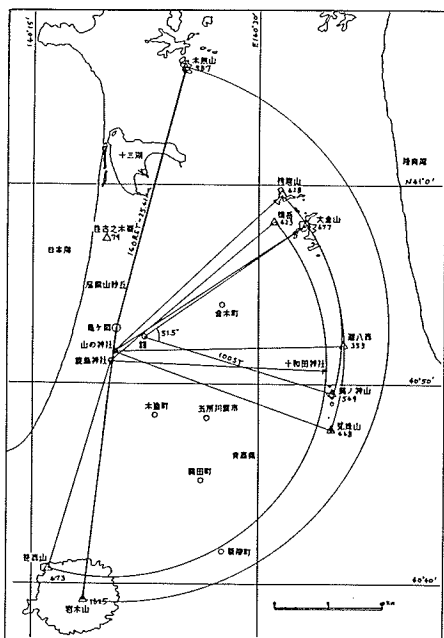


図-16 亀ヶ岡の双山群

(25.41 km)である。この長さはアビドスの三角形の底辺長700STのほぼ1/5*である。

なお、半島の東寄りに屏風のように弧状に連なる津軽山地の山々に対してはいくつかの双山点に神社があるようであるが、とくに、語部落の神社の双山の場合は山頂までの距離が100ST、夾角がピラミッドの底角51.5°となっている。

3.3 京都

京都はいままでもなく桓武天皇の遷都(AD794)以来明治元年(1868)まで、1,000年にわたる日本の首都であった。

御所の位置については、さらに大スケールの分析が必要であるのかも知れないが、こゝでは小スケールの双山点のいくつかを示す。

御所の北側地域で最大の双山は最高峰大比叡(848)と釈迦谷山(291)の双山点である阿弥陀ヶ峰(豊公墓、約190 m)であり、次は東山にある大文字山(466)と北の442 m 峰 に対する双山点船岡山(112)の山頂である。また、船岡山頂のやや東に位置する建勲神社は西の雙ヶ岡の1峰(116)と北の446 m 峰に対してほとんど正三角形の双山点にある。金閣寺と銀閣寺もそれぞれ双山点や複合重双山点にあるが、とくに、大比叡と釈迦谷山の双山点に当る京大土木教室**前地点は東山442 m 峰と船岡山

に対しても双山点となる特異地点であり、さらに、三角形京大土木教室前—東山442 m 峰—船岡山は崇神の三角形と相似である。なお、三角形船岡山—釈迦谷山—賀茂御祖神社および三角形衣笠山—附五位山—船岡山はいずれも崇神の三角形と相似であって、志賀島以来のこの図形がモチーフとなっているようである。

ところで、これらの3コの崇神の三角形はいずれも1頂点が船岡山であるが、それらの二等辺長は

- ① 京大土木 3,970 m
(21.87 RST = 3,500 RST/160
= 1,750 RST/80)
- ② 賀茂御祖神社 2,837 m
(15.63 RST = 2,000 RST/128)
- ③ 衣笠山 1,814 m
(10.00 RST = 2,000 RST/200)

であって、これらはローマ市(3,500 RST)、ピサ市(1,750 RST) およびフィレンツェ市(2,000 RST)にみられたアルプスの双山までの距離と関係づけられているとみられる。ただ、④は700 RST/32、③は400 RST/40 でもあるから、アビドスの三角形に関係づけられているとみることもできるが、②については分母を整数にして700または400に関係づけることができない。

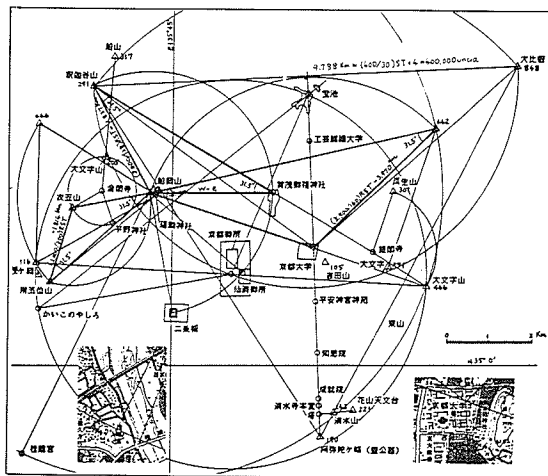


図-17 京都市北部の双山群

* これによって、立岩と亀ヶ岡とはアビドスの三角形で関係づけられ、双山の規模は立岩：亀ヶ岡 = 400:700 = 1:1.75となっていることになる。ただし、聖山論的次元は立岩の方が高い。

** 京都大学は明治30年(1897)に専門学校であった第三高等学校の工学部が昇格して理工科大学として発足したのであるが、土木工学教室はもっとも古い学科であり、機械科や電気科もこれから分かれた。

もともと賀茂氏は秦の後裔とされているが、大秦(うづまさ)は中国でローマの意味とされていることと符号する。

さらに、大比叡と釈迦谷山間の距離がアビドスの三角形の二等辺長 400ST の $1/30$ 、2,463m の4倍にほぼ等しく、この長さはローマの 400,000 Uncia であることは注目すべきであり、この線の東西線に対する傾き 3° 弱、すなわち、京大土木教室前・平安神宮神苑・知恩院・成就院庭園・清水寺本堂および塔などを通り、豊公墓に向う双山線の南北線に対する傾き同じく 3° 弱が、京大本部構内の2本の幹線道路・吉田東通りおよび平安神宮参道の南北に対する傾きを決定しているとみられる。

なお、船岡山を中心とし、東山の大字山までの距離(6.77km)を半径とする円周上には西側に高尾山神護寺・松尾神社および桂離宮があり、桂離宮の建物の方向はこの半径方向北 25.5° 東が基準となっているとみられる。

3.4 北海道

北海道にもストーンサークルなどの縄文時代遺跡があり、亀ヶ岡式土器も出土するから、東北地方と変らない先史時代文化があったと考えられる。

図-18に、札幌市*・旭川市** および神居古潭について双山関係を示したが、釧路市や室蘭市なども双山点を形成している。

札幌市の場合は複雑な複合双山関係を示しているが、とくに、夕張岳(1668)および暑寒別岳(1491)からの距離は正しく 400ST (73.9km) であり、また、札幌—夕張岳—暑寒別岳の二等辺三角形は両底角が 52° であって、ピラミッド図形を形

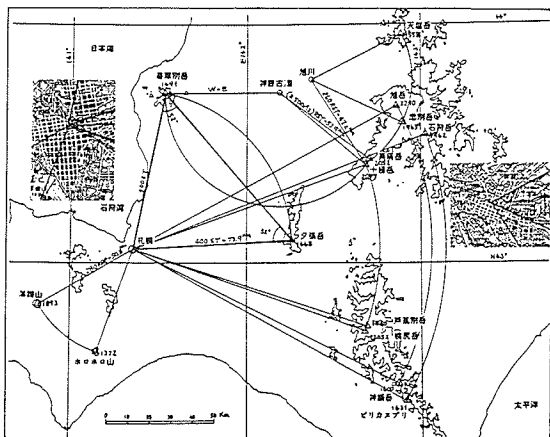


図-18 石狩川の双山群

成しており、これを札幌の三角形と称する。この三角形はエジプトのセラピト・エル・カディム神殿について示したシナイの三角形とほとんど等しい三角形であり、差はSTとRSTの差 1.78% であって、札幌の三角形の方がやや大きい。***

なお、札幌市と羊蹄山間の距離 50.8km (280RST) はクノッソスとトロイ間の距離 2,800ST の約 $1/10$ であり、また、オリンパス山とアテネ間の距離 1,400ST の約 $1/5$ である。また、旭川市と十勝岳間の距離 47.2km (260RST) はベニスとグロスベネディガー山の距離 1,040RST の $1/4$ であり、神居古潭と十勝岳の距離 53.2km もすでに示したローマ市の 3,500RST の $1/12$ またはピサ市の 1,750RST の $1/6$ にほとんど等しい。この場合、正しくは 52.94km となって、やや短いのが神居古潭の部落寄りの位置に双山点をとれば一致する。一般に認められ、地図上に示されている石狩川岸の聖点は図-19のピラミッド図形の頂点を意識したもののようである。

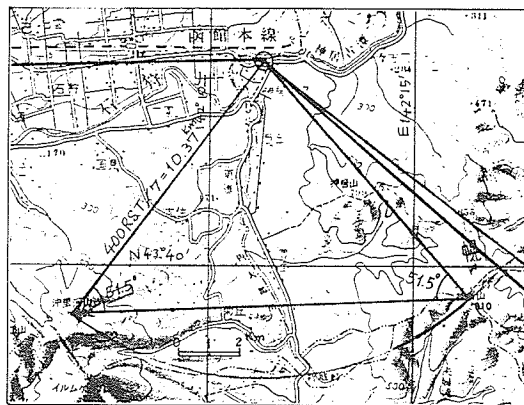


図-19 神居古潭のピラミッド図形

4. むすび

日本で研究した聖山解析手法が地中海地域に明快に適用できたことは仮説の妥当性と国際性を示している。ここで取り扱った事例は網羅的な研究の結果ではないので、今後世界の各地域で事例が発見される可能性がある。

ところで、今回の研究結果はいずれの地点もアビドスの三角形の 400ST (デンデラ) または 700ST (アビドス) に結びついたのであるが、もっとも特

* 双山点は道庁である。

** 双山点は上川支庁または市役所である。

*** 前回の「聖山論」¹³⁾で示した近江木村の三角形は二等辺長が 73.16km であって、シナイの三角形の 72.6km と札幌の三角形の 73.9km のほぼ平均に近いピラミッド図形である。

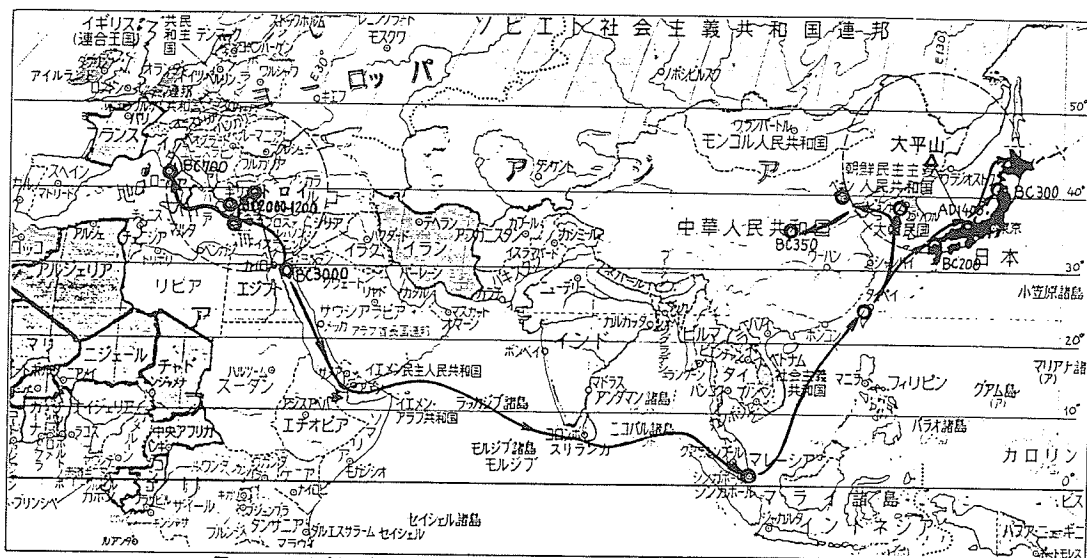


図-20 エジプト王朝の東遷 — トロイの円と大平山の円はいずれも半径約1,230 km

徴的なことは、最古の例としてあげたセラビト・エル・カディム神殿のシナイの三角形とほとんど同形のピラミッド図形がもっとも東に近い例としてあげた札幌に現われたことであり、また、朝鮮北部とアテネの関係および京都とローマの関係も注目される。

聖山測量の実施時期をみると、図-20のように、地中海地域ではBC3000～BC700、東アジアではBC350～AD1400とほぼ2,000年のひらきがあるが、ローマがイタリア半島の覇権を確立したBC264年に至る頃に急速に東アジア地域での適用が進展しているのは、両地域の間での技術・政治集団の遷移を推定させる。

昨年の「聖山論」で5例、今回の「統聖山論」で14例提示した中で、首都などの政治都市でないものは、セラビト・エル・カディム神殿と神居古潭の2例のみであり、いかに聖山思想が科学と宗教を基盤としてエジプト系世界における政治都市の発展に影響を与えたかを理解することができる。

中国・朝鮮・日本など東北アジア地域における紀元前後1,000年の王権の興亡は地中海地域における民主化によるギリシャ・ローマ文明の発展、すなわち、古代王権の滅亡と時期を同じくしているが、その原因はBC3000～1000年にわたって、エジプト・エーゲ海・エトルリアなどでギリシャ・ローマ文明の基礎となった古代地中海文明を築いた古代王権的政治勢力の東遷にあるのではないかと考えられる。

耶馬台国問題や大和朝廷の起源など弥生時代から古墳時代（BC200～AD400）にかけての日本の急速な政治的發展はこのような世界的背景の中で理解する必要があるようである。

参考文献

- 1) R. ギヴェオン（酒井佐六訳）「シナイの石は語る」、学生社、昭. 49. 11. (1974. 11.)
- 2) 木村俊晃「古代地域計画の原理その2 尺度論」、土木学会日本土木史研究委員会、第3回日本土木史研究発表会論文集、昭. 58. 6. (1983. 6.)、pp. 119～125.
- 3) 木村俊晃「古代地域計画の原理その3 幾何図形論」、土木学会日本土木史研究委員会、第4回日本土木史研究発表会論文集、昭. 59. 6. (1984. 6.)、p. 135～142.
- 4) E. ナック・W. ヴェークナー（柴谷哲朗訳）「古代ギリシャ」、佑学社、昭. 61. 4. (1986. 4.)、p. 42.
- 5) 実業之日本社「ギリシャ・エーゲ海」、昭. 61. 3. (1986. 3.)、p. 291.
- 6) 前出4)、p. 86.
- 7) 野上素一・金倉英一「エトルリア・ローマ・ボンベイ」、新潮社、昭. 45. 1. (1970. 1.)、p. 84.
- 8) 木村俊晃「古代地域計画の原理その4 聖山論」、土木学会日本土木史研究委員会、第5回日本土木史研究発表会論文集、昭. 60. 6. (1985. 6.)、p. 239.
- 9) 前出7)、pp. 174～175.
- 10) 前出8)、p. 239.
- 11) 前出3)、p. 138.
- 12) 山野真一「祭祀遺跡」、ニューサイエンス社、考古学ライブラリー10、昭. 57. 5. (1982. 5.)、p. 18.
- 13) 前出8)、p. 240.